

(PDF版・1の5) 『教会教義学 神論Ⅰ／1 神の認識』 「五章 神の認識 二十五節 神認識の実現」 「一 神の前での人間」

(文責・豊田忠義)

「五章 神の認識 二十五節 神認識の実現」 「一 神の前での人間」 (1-54頁)

「一 神の前での人間」

「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とするその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」(「啓示の<しるし>」)として——すなわち、自己自身である神としての(ご自身の中での神としての)「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「三位相互内在性」における三位一体の神の、われわれのための神としてのその「外に向かって」の「失われない差異性」における第二の存在の仕方(性質・働き・業・行為・行動、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事)、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリストによって「直接的に唯一回的特別に召され任命されたその人間性と共に神性を賦与され装備された預言者および使徒たちの<イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教>」として「啓示との<間接的同一性>〔区別を包括した同一性〕」において現存している第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているところの、キリストにあつての神としての「神」が、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>——すなわち、イエス・キリストの「啓示の出来事」としての客観的な「存在的な必然性」とその「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「復活され高擧されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」としての主観的な「認識的な必然性」を前提条件とした徹頭徹尾聖霊と同一ではないが聖霊によって更新された人間の理性性としての主観的な「認識的なラチオ性」と三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の实在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に可視的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」(換言すれば、聖霊自身の業である「キリスト教に固有な」類と歴史性)の関係と構造(秩序性)としての客観的な「存在的なラチオ性」という<総体的構造>に基づいて、「信仰の中で人間的な認識の対象となるとするならば、そのことは、神は人間的な直観と…概念を用いて把握する働きの対象となるということの意味しなければならない」し、「まさに、そのことに基づいて、神について語り・聞くことが可能となり、必然的となる」。このような訳で、「すべての人間的な直観と概念を用いて把握することが神認識なのではない」のであって、信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的直観に実現された神の恵みの出来事としての「神認識」は、生来的な自然的な人間の自由

な内面の無限性、人間の自由な自己意識・理性・思惟の類的機能、人間的欲求やを駆使しての「そのほかのすべての認識の系列の中での特別な、徹頭徹尾独一無比な出来事である」。したがって、「信仰の認識は、それとして原則的に、人間が、そのほかの諸対象とく区別されている」ように、また人間自身ともく区別されている神と結ばれていることを意味している〔「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するというく方式くの下で、まさに神の側の真実の中において、われわれ「人間からは何ら応答を期待せず・また実際に応答を見出さずとも、神であることを廃めずに、何ら価値や力や資格もない・罪によって暗くなり・破れた姿の人間の存在を己の神的存在につけ加え、身内に取り入れ、それをご自分と分離出来ぬように、しかも混淆〔混合、共働、協働、神人協力〕されぬように、統一し給うた」神と結ばれている〕。したがってまた、「そのような特別な認識〔信仰〕は、「人間的な直観と概念を用いて把握する一般的な理解からして定義されることはできず、ただその特別な対象としての〔キリストにあつての神としての〕神から〔イエス・キリストにおける神の自己啓示からして〕定義されなければならない」。したがってまた、生来的な自然的な人間的理性や人間的欲求やによって対象化され客体化された人間的な自然（観念的生産物）としての「存在者」、人間自身の意味世界・物語世界・神話世界は、キリストにあつての神としての神ではない。したがってまた、われわれは、信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主体に実現された神の恵みの出来事としての「神認識とその対象」が、「そのように区別されているということ」を、「神の超越性および超世界性についての考えに基づいて教えているのではない」し、われわれ人間の信仰の感覚と知識を内容とする「われわれの信仰経験の主張という形で教えているのでもない」。

そのような訳で、「われわれは、ここでもまた、〔それ自身が聖霊の業であり啓示の主体的可能性として客観的に可視的に存在している「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である〕聖書の中で信仰として宣べ伝えられ・指摘されていることを、聖書から〔聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、絶えず繰り返す、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方〕読み取ることによって、そのことを教えているのである。そこにおいては、「神的な『彼』の客体性の中で人間に会い給う方」は、「その方を認識するいかなる人間的な主体とも同一でないように、またそのほかの人間的な認識の客体〔人間的な自然（観念的生産物）〕の系列の中でのいかなる客体〔人間的な自然（観念的生産物）としての「存在者」、その人間の意味世界・物語世界・神話世界としての「存在者レベルでの神」〕とも同じでないということについては何の疑いもあり得ない」。キリストにあつての神としての「神を信じる信仰は、聖書の中では、例外的な仕方

事となって起こる〔すなわち、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて出来事となって起こる〕。キリストにあつての神としての「神は、ご自分をも、また信じる人間をも『取り出し』給う」、キリストにあつての神としての「神は、ご自分を聖と為し給う、換言すればご自分を〔神と人間との無限の質的差異の下で〕ほかのすべての対象から分けて〔区別して〕目立たしめ給う。まさにそれと共に、また人間をも神との関係の中で聖め給う、換言すればほかと分けられた〔区別された〕立場に置き給う。イスラエルは諸国民から選ばれ・連れ出される。そして教会の現実存在は、今やすべての民を貫通してなされる人間を……固有な、特別な立場——すなわち、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉の中での、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の实在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に可視的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である「聖書への絶対的信頼」に基づいて、聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、純粋な教えとしてのキリストにあつての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」（「教えの純粋さを問う」教会教義学、福音主義的な教義学の課題）と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての「隣人愛」（区別を包括した単一性において教会教義学に包括された「正しい行為を問う」特別的な神学的倫理学の課題）という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、共同ノ教会」共同性を目指すという「固有な、特別な立場へと選び出し・連れ出すという形で起こっている」。「この固有な、特別な立場こそが信仰の立場である」。「信仰とは、聖書の中では、聖別を意味している。そして、聖別とは、聖書の中では、選を実行に移すことである、特別な場所、時間、人間、出来事、歴史的な関連を選別することである」。「そのような聖別が起こるところ、そこでは、聖書によれば、神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主体に実現された神の恵みの出来事〕にまで来る」。その「聖別と選びの根拠と主体は、自分自身を選び、それからまた栄光の中で自分自身を聖別される聖書的信仰の〈対象〉、〔キリストにあつての神としての〕神である」。自己自身である神としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする三位一体の神の、われわれのための神としての「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方（子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）、それ自身が出来事の自己運動を持っている「啓示ないし和解の实在」そのものとしての起源的な第一の形態の「神の言葉を通して起こるところのもの、そのものは、この選びと聖別の歴史である」、換言すれば聖霊自身の業である「神の言葉の三形態」、すなわち「キリスト教に固有な」類と歴史性との関係と構造（秩序性）の現存である。われわれは、その聖霊自身の業である「神の言葉の三形態」、すなわち「キリスト教に固有

な」類と歴史性の関係と構造（秩序性）としての「歴史を堅くとって離さないでいる限り、われわれ自身の信仰が活動するようになる。……ただそのような仕方だけで、われわれは、〔キリストにあつての神としての〕神を、ほかの諸対象から、それと共に神認識〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事〕をそのほかの諸認識〔人間的理性や人間的欲求やによって対象化され客体化された人間的自然（観念的生産物）としてのその人間自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者」、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神への信仰」の認識〕から区別する」。

第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあつての神としての「神は、先ず第一に、……ご自身を認識し給うことが確かである限り、……自分自身に対して对象的であり給う」。言い換えれば、自己還帰する対自的であつて対他的な完全に自由な「父なる名の〈内〉三位一体的特殊性」・「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の「根源」・起源としての「父は、子として自分を自分から区別するし自己啓示する神として自分自身が根源〔・起源〕である」ということ、それ故に「その区別された子は、父が根源〔・起源〕であり」、「神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊は、父と子が根源〔・起源〕であり給う、すなわち「父は子にとって、子は父にとって、何らかの媒介物なしに対象であり給う」。自己自身である神としての自己還帰する対自的であつて対他的な完全に自由なキリストにあつての神としての「神の三位一体的な生そのもので〔すなわち、自己還帰する対自的であつて対他的な完全に自由なキリストにあつての神としての神の「三位相互内在性」の中で〕、対象性は、それと共に認識は、……被造物的な対象性と認識が存在する以前に〔われわれのための神としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方——すなわち、「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、「キリスト教に固有な」類と歴史性）の関係と構造（秩序性）が存在する以前に〕……**神的な実在である**」。したがって、「われわれは、この〔自己還帰する対自的であつて対他的な完全に自由なキリストにあつての神としての神の「三位相互内在性」の中での〕**対象性を〈主要な〉神の対象性と呼び**」、この「〈主要な〉対象性」から、「〈副次的な〉神の対象性を……換言すれば〔その自己自身であるキリストにあつての神としての〕神が〔われわれのための神としてのその「外に向かつての」外在的な「失われない差異性」における第二の存在の仕方における〕その啓示の中でわれわれのために持ち給い、その中で神が……われわれに対しても認識すべくご自身を与え給う〈副次的な〉神の対象性を区別する」。この時、その「副次的な対象性」は、「われわれ被造物に適した形式ということでもって区別される」ところのそれである。言い換えれば、キリストにあつての

神としての「神は、ご自分にとって〔自己自身である神として〕＜直接的に＞対象的であり給う。しかし、神は、われわれにとっては〔われわれのための神としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」における三つの存在の仕方において、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞における客観的に可視的に存在している「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）において〕＜間接的に＞対象的であり給う」。キリストにあつての神としての「神は、その啓示の中で、神がわれわれに対して、そのほかの諸対象のしるしと外皮の下で出会われることによって、われわれにとって間接的に対象的であり給う〔換言すれば、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞における客観的に可視的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に基づいて出会われることによってわれわれにとって間接的に対象的であり給う〕」。「それらそのほかの諸対象のしるしと外皮の中で、しるしと外皮と共に、しるしと外皮の下で、われわれは、神を信じ、神を認識し、神に向かつて祈りを捧げる」、換言すれば「われわれは、〔キリストにあつての神としての〕神を、その衣でもって覆われた対象性の中で〔「対象的な」神認識において〕信じるのであって、決してその衣でもって覆われない対象性の中で〔「非対象的な」神認識において〕信じるのではない」。「それであるから、われわれが神を信仰の中で認識するということ」は、「われわれが、神を、たとえ衣でもって覆われたものであるとはいえ〔換言すれば、たとえ第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である「啓示の＜しるし＞」としての聖書、その聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした第三の形態の神の言葉である「啓示の＜しるし＞」の＜しるし＞としての教会の客観的な信仰告白および教義 Credo という衣でもって覆われたものであるとはいえ〕、＜神の＞対象性の中で＜まことに＞認識するということ」、「そして、われわれは、神を、＜ただ＞その＜衣でもって覆われた＞対象性の中で＜だけ＞まことに認識するということ」の「二重性を意味している」、それ故に「われわれは、事情はそうであるということを確認することでもって満足する」（「カール・バルト——彼自身の著作に即した彼自身の神学をトータルに把握するためのキーワード（その1）の◎イエス・キリストにおける神の自己啓示自身が持っている＜その自己証明能力の総体的構造＞について」および「カール・バルト——彼自身の著作に即した彼自身の神学をトータルに把握するためのキーワード（その4）の＜神の言葉の三形態＞の（ア）・（イ）・（ウ）」を参照されたし）。

そのような訳で、「そのような仕方でも」、区別を包括した単一性において、「その神の副次的な対象性は神の主要な対象性の中にその対応と根拠を持っている」が故に、キリストにあつての神としての「神は、……完全な真理性の中で対象的であり給う」。キリストにあつての神としての「神は、先ず第一に、ご自分にとって対象

的であり」、それ故に「われわれに対するその啓示の中で〔その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉における三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の實在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に可視的に存在している「啓示ないし和解の實在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」、すなわち聖霊自身の業である「キリスト教に固有な」類と歴史性の関係と構造（秩序性）の現存の中で〕、まさに神がご自身で現にあり給うもの以外のほかのものであり給わない」。イエス・キリストにおける神の自己啓示は、自己自身である神としての（ご自身の中での神としての）自己還帰する対自的であって対他的な（完全に自由な）聖性・秘義性・隠蔽性において存在している（それ故に、人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、われわれは、神の不把握性の下にある）「失われない単一性」・神性・永遠性を内在本質とする「父なる名の内三位一体的特殊性」・「神の内三位一体的父の名」・「三位相互内在性」における「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」（それ故に、「三神」、「三つの対象」、「三つの神的我」ではない）の、われわれのための神としての「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での「三度別様」な「三つの存在の仕方」（性質・働き・業・行為・行動・活動）、すなわち起源的な第一の存在の仕方であるイエス・キリストの父——啓示者・言葉の語り手・創造者、第二の存在の仕方である子としてのイエス・キリスト自身——啓示・語り手の言葉・和解者、第三の存在の仕方である神的愛に基づく父と子の交わりとしての聖霊——「啓示されてあること」・「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）・救済者なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体におけるその第二の存在の仕方、すなわち「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間、「真に罪なき、従順なお方」、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」、「ただイエス・キリストの名だけ」において、その内在本質である「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性の認識と信仰を要求する啓示である。したがって、先ず以て、第二の問題である神の本質の問題（神の本質を問う問題）を包括した第一の問題である神の存在の問題（神の存在を問う問い）が問われなければならない。このような訳で、「ここで、すべての『非対象的な』神認識に対して戸が〈閉じ〉られる」、「『非対象的な』神認識はそれとして神認識ではない〔すなわち、『非対象的な』神認識は、それとして、キリストにあっての神としての神の認識、信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主体に実現された神の恵みの出来事ではない〕」。人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、われわれ人間は、「常に、〈間接的に〉〔キリストにあっての神としての〕神の前に立っている」。

前段の思惟と語りは、当然のことながら『教会教義学 神の言葉』からやって来るその蓄積された思惟と語りにおけるそれである。われわれは、『ルドルフ・ブルトマン』を含めたその思惟と語り総体が、次のような客観的な正当性と妥当性をもってなされた根本的包括的な原理的なフォイエルバッハのキリスト教に対する批判（シュライエルマッハーに代表される近代主義的プロテスタント主義的神学に対する批判）を包括し止揚し克服していることを知る事ができるし、また客観的な正当性と妥当性をもってなされた根本的包括的な原理的なハイデッガーのブルトマン神学（その学派、それに類する学派）に対する批判を包括し止揚し克服していることを知る事ができる——

（1）近代主義的プロテスタント主義的神学者のシュライエルマッハーによれば、第三の形態の神の言葉に属する「教会とは、『ただ自由な人間的行為を通して発生し、またただそのような自由な人間的行為を通して存続することのできる共同体』であり〔ただ自由な人間的行為による共同体〕、〔自由な人間的な〕『敬虔性〔「啓示時自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉における三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の实在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」としての第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準としないところの、恣意的・独断的なベクトルを持つ「絶対依存感情」〕と関連した共同体』である」、「信仰も、人間実存の歴史的存在の一つの在り方として理解される」。その「近代主義的思惟は、人間が、誰かによる呼びかけを受けることなしに、（中略）人間がじぶんを相手に自分だけでひとりごとを言っているのを聞く」。したがって、近代主義的プロテスタント主義的なキリスト教の「宣教は、『教会』と呼ばれる人間的な共同体の一つの必然的な生の表現となる」。したがってまた、彼らは、「人間の精神的な促進のために、自分と彼らに共通な宝庫からくみ取りつつ、この宝庫をさらに豊かにするために、自分自身の歴史と現在の解釈を表現しようとする」し、恣意的独断的な「自己表現としての宣教を企てる」。バルトは、このようにして、自然神学の段階で停滞と循環を繰り返している近代主義的プロテスタント主義的神学者のシュライエルマッハー神学等を、客観的な正当性と妥当性をもって根本的包括的に原理的に批判した。何故ならば、ブルトマン神学を含めてシュライエルマッハー等の近代主義的プロテスタント主義的神学は、まさにフォイエルバッハのキリスト教批判の対象そのものであったからである——「人間の内的生活は、自分の類・自分の本質に対する関係における生活である。人間は〔自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を駆使して〕思惟する、すなわち人間は会話をする、人間は自分自身と話をする〔人間は、自由な内面の

無限性、自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を持つ〕。動物は自分以外の他の個体がいなければ類の機能をひとつもはたすことはできない、しかし**人間は他人がいなくとも考えるとか話すとかという類的機能……を果たすことができる**」、それ故に「人間は自分の本質〔自由な内面の、自己意識・理性・思惟の<無限性>〕を対象化し、そして次に再び自己を、このように対象化された主体や人格へ転化された存在者（本質）の対象とする。これが宗教の秘密である」、この時「（中略）**神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識である**」、「もし君が無限者を思惟するならば、そのとき君は思惟能力の無限性を思惟し且つ確証しているのである。そして、もし君が無限者を情感するならば、そのとき君は感情能力の無限性を情感し且つ確証しているのである。理性の対象とは自己自身にとって対象的な理性であり、感情の対象とは自己自身にとって対象的な感情である」、このような訳で「（中略）神の啓示の内容は、神としての神から発生したのではなくて、人間的理性や人間的欲求やによって規定された〔すなわち、人間的理性や人間的欲求やによって対象化され客体化された人間的自然（観念的生産物）としての「存在者」、彼自身の意味世界・物語世界・神話世界、「存在者レベルでの神」としての〕神から発生した……。』（中略）こうして、この対象に即してもまた、『神学の秘密は人間学以外の何物でもない！』……」（『キリスト教の本質』）、「神とはまさに、人間の想像能力・思惟能力・表象能力の本質〔自由な内面の<無限性>〕が、現実化され対象化された……絶対的な本質（存在者）、……と考えられ表象されたもの以外の何物でもない」（『フォイエルバッハ全集第12巻』「宗教の本質にかんする講演 下」）と、フォイエルバッハは自然神学の段階にある近代主義的プロテスタント主義的神学を批判している。

（2）「『今日まさにこのマールブルク〔「絶対的規準としての先行的理解と解釈学的原理という**新約聖書の釈義に役立つ新しい<哲学的な>鍵**」（人間学的な鍵）を**前期ハイデッガーの哲学に見出したブルトマン神学**、換言すれば「**人間学の後追い知識**」としての**ブルトマン神学**、その学派〕では、無理やり模造された敬虔さと結びついて、弁証法の見せかけがとくに肥大している』が、それよりは『むしろ無神論という安っぽい非難を受け入れた方がよい』、『いわゆる〔人間の自由な自己意識・理性・思惟の類的機能を駆使して対象化され客体化された人間的自然（観念的生産物）彼自身の意味世界・物語世界・神話世界としての〕存在者レベルでの神への信仰は、結局のところ〔キリストにあつての神としての〕神を見失うことではなかろうか』」と**ブルトマン神学を、人間学領域においてハイデッガー自身が批判している**（『ハイデッガーの思想』）。ブルトマンは、その神学において、近代的な「教養人〔知識人〕」に通用する神学を目指すために、自然神学の段階に停滞したまま、それ故に先ず以て第一義的に「十字架につけられ、復活したイエス・キリストにおけるわれわれ実存という場所において、われわれの信仰より以前にも、信仰なしでも、……不信仰に抗しても、われわれのために生きて、われわれを支配し、われわれ愛し給うイエ

ス・キリストを、認識し、持つことができることを示すということ」を目指すことをしないまま、ただ「同時代の人たちの思考の前提に対して」、「そこから形成された理解の規準に対して」、換言すればただ近代的な「教養人〔知識人〕」に対して、「誠実と真実をささげ」、「責任的応答をなそう」としたのである——バルトは、このようにして、近代主義的プロテスタント主義的神学者のブルトマン神学を、客観的な正当性と妥当性をもって根本的包括的に原理的に批判した。自然神学の段階で停滞し循環することを目指すことをしないベクトルを持つところの、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉における、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）に連帯し連続し、その秩序性における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした第三の形態の神の言葉である教会の宣教およびその一つの補助的機能としての教会教義学であれ、それが人間的な営為を介在させる限り「誤謬は〈可能〉である」。しかし、その神学が、自然神学の段階で停滞と循環を繰り返すところの、人間学や人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍の「後追い知識」を目指すベクトルを持つそれであるならば、それらすべての神学は、その最初から「誤謬は〈必然〉である」ということは確かなことである——そのことについての認識と自覚を欠如させたところの、自然や人間に関わる自然科学部門や人文科学部門の学問・研究の自由な場所である「すべての大学社会の神学」は、その場所からして、不可避免的に、自然神学の段階で停滞と循環を繰り返えさざるを得ない人間学や人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍の「後追い知識」としてのそれとして、「何らかの抽象を以て始められ何らかの空論に終わるところの神学である」（『ルートヴィヒ・フォイエルバッハ』）。

人間論的な自然的人間であれ、教会論的なキリスト教的人間であれ、誰であれ、われわれ人間は、「常に、〈間接的に〉〔キリストにあっての神としての〕神の前に立っている」のであるが、その神以外の「〈そのほかの〉対象……自余の諸対象の系列に属する対象」〔すなわち、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉における客観的に存在している「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である聖書（その最初の直接的な第一の「啓示の〈しるし〉」）、その聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした第三の形態の神の言葉である教会の客観的な信仰告白および教義 Credo（「啓示の〈しるし〉」の〈しるし〉）の前には直接的に立っている〕。キリスト復活から復活されたキリストの再臨までの聖霊の時代、中間時においては、終末論的限界の下で、その「そのほかの対象性が神の対象性の代りをつとめる」。その「そ

のほかの対象の対象性の中で、人間は、神を認識〔・信仰〕する」、その「そのほかの対象を人間は知覚する、直観と概念を用いて把握する」。その「そのほかの対象の中で、そのほかの対象と共に、＜神の＞対象性を知覚し、直観と概念を用いて＜神の＞対象性を把握する」。このような訳で、その「**そのほかの対象**」は、「**それを通して神がご自分を人間に対して認識するよう与え、その中で人間が神を認識する手段である**」。したがって、信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事としての「**神認識の特別な際立った出来事**〔この「**出来事の特殊性**」〕は、「**＜特別な＞意味での神の業との出会いの特別な出来事である**」——ここに、この「**出来事の特殊性**」がある。言い換えれば、それは、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞における神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいた徹頭徹尾聖霊と同一ではないが聖霊によって更新された人間の理性性と客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした「**拔擢され、役立つものとなった**」第三の形態の神の言葉である教会の宣教を通したところの、「**啓示ないし和解の實在**」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリストとの出会いの特別な出来事である。このような訳で、「この出来事の特殊性」に対して、「神の本質を被造物的實在の領域の中で指し示しているそのほかの対象の特殊性が……対応している」。

ここでもまた、「不可欠条件が問題である」——それは、「信仰の中での神認識は、原則的に、常に、そのような間接的な神認識、＜その業＞の中での神認識、それらの神の特別な業の中で、換言すれば被造物的實在が神的な対象性を証しするものに定められ、用いることの中でなされる神認識である」ということである、「信仰は、それが、その間接的な神認識でもって満足するということを通して、不信仰、間違った信仰、迷信から区別される」ということである。このような訳で、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞における神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて与えられる「**信仰は、本当に、〔キリストにあっての神としての〕神を、〔啓示ないし和解の實在〕そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の實在」（「啓示の＜しるし＞）としての第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているところの、父、子、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事全体としての〕そのみ業の中で＜認識する＞ことに対して感謝する**」。その「**信仰**」は、「**神認識**」に関して、「**諸対象**」を、「**自分自身の人間的な好みに基づいて**」「**恣意的に……しるしに〔選び〕任命**〔すなわち、「啓示の＜しるし＞」、「啓示の＜しるし＞」の＜しるし＞として

選び任命]」することはしない。すなわち、その「信仰は、[キリストにあつての神としての] 神を、神<ご自身>によって選ばれた諸対象の手段を通して認識する〔換言すれば、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>におけるそれ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）におけるその最初の直接的な第一の「啓示の<しるし>」としての第二の形態の神の言葉およびその聖書を自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として教会の客観的な信仰告白および教義 Credo としての第三の形態の神の言葉〕の手段を通して認識する」。その「信仰は、その認識を遂行しつつ、神の選びと聖別を確認し承認する」。したがって、第三の形態の神の言葉である教会における「礼拝が、神ご自身によって〔すなわち、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の<総体的構造>における神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて〕可能とされ必然的とされる場所、そこではどのような偶像礼拝も行われぬ。何故ならば、そこでは、第三の形態の神の言葉である教会の宣教およびその一つの補助的奉仕（教會的な補助的奉仕）としての教会教義学（福音主義的な教義学）は、終末論的限界の下でのその途上性で、絶えず繰り返す、「聖書への絶対的信頼」（『説教の本質と実際』）に基づいた聖書に対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している「啓示ないし和解の实在」そのものとしての第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）におけるその最初の直接的な第一の「啓示ないし和解」の「概念の实在」（「啓示の<しるし>」）としての第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしてのキリストにあつての神としての神、キリストの福音を尋ね求める「神への愛」（「教えの純粋さを問う」教会教義学の課題）と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」——すなわち、自己欺瞞に満ちた市民的観念・市民的常識的な通俗的な意味での隣人愛ではなくて、純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請、すなわち全世界としての教会自身と世のすべての人々が純粋な教えとしてのキリストの福音を現実的に所有することができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝え、区別を包括した単一性において教会教義学に包括された「正しい行為を問う」特別な神学的倫理学の課題という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活ける「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指して行くからである。「衣でもって覆われた神の対象性に関するそれらすべての条件と共に、信仰は立ちもすれば倒れもする。また信仰と共に神認識は立ちもすれば倒れもする。これらもろもろの条件の下で、イエス・キリストの教会の中で、

神について語られ・聞かれる」。